

# ポーターズ乳幼児教育プログラムによる発達遅滞乳幼児に対する早期訓練

東京学芸大学教育学部 山口 薫

## 目 的

「ポーターズ早期教育ガイド」(アメリカ合衆国ウィスコンシン州ポーターズ:1976年改訂版)を、日本の文化・言語体系・生活習慣に合わせて翻案した「ポーターズ乳幼児教育プログラム」の臨床的妥当性を検討するとともに、早期対応の効果を評価する。

## 方 法

(1) 「ポーターズ乳幼児教育プログラム」……このプログラムは、0-6歳の発達水準にある障害乳幼児に適用可能な包括的な規準準拠型のプログラムであつて、子供が習得すべき総数562の指導項目(行動目標)が、発達の系列順に配置されたチェックリストと、行動目標および活動例が1項目1枚のカードに記載されたカード・ファイルとが準備されている。そして6領域(「乳児期の刺激」「社会性」「言語」「認知」「身辺自立」「運動」)に区分された発達領域の各々において、行動目標の達成をめざす。なお、カリキュラム・カードは識別しやすいように、チェックリストの各発達領域の色に対応した色で塗り分けられている。

(2) 対象児……昭和60年2月現在、155名の発達遅滞乳幼児が療育指導に参加した(男児93名、女児62名)。うち、ダウン症児は95名(61.3%)である。ダウン症児の中で心疾患を合併する者は28名(29.5%)であつた。

(3) 指導場所・手順……東京学芸大学附属養護学校、杏林大学附属病院小児科、ポーターズ発達相談室の3か所で療育指導を実施した。週/回の通所指導を原則として、週間指導プログラムを母親に渡し、家庭で母親による指導を実施させ、1週間ごとに課題習得状況をチェックしながら課題分析によるステップ指導を行つた(しかし、実際は事情により、週/回の頻度で来所できた対象児は全体の約15.5%にすぎなかつた)。

(4) 効果の評価……「発達経過表」(2か月ごとに達成課題を記入)および「津守・稲毛式発達検査」(4か月ごとに実施)を指標とした。

## 結果と考察

(1) 発達経過表にみる課題習得の推移……対象児によつて課題習得の速さや状況には遅速はあるものの、指導経過に伴つて、全員が確実に課題を達成していつた。課題達成の推移は必ずしも指導項目の系列順とは限らず、個々の対象児の発達状態に依つて、時点時点で、適切な課題を与えていくことの重要性が示唆された。

(2) 加齢に伴うDAの変化……図1は、「津守・稲毛式発達検査」が3回以上施行できた対象児について、CAの増加に伴つて変化するDAを示したものである。これを見ると、DAの停滞した対象児は全くいなかったが、その変化曲線の上昇勾配、すなわちDAの変化の様相は対象児によつて異なり、指導開始時年齢、障害の種別・程度、合併症の有無などが、関連要因として考えられた。

(3) 加齢に伴うDQの変動……図2に、ダウン症の参加対象児におけるCAの増加に伴うDQの変動を示す。1歳6か月以降DQ値は安定するが、変動傾向は上昇する場合と、ほぼ同じ値を維持する場合とに大別でき、DQの顕著な低下は認められなかつた。従来知見と総合すると、早期対応の効果の反映であると思われる。図3は、ダウン症以外の対象児におけるDQの変動であるが、ダウン症児のそれと比べて、変動傾向は個人差がおびただしかつた。

図1 加齢に伴うDAの変化(全体)

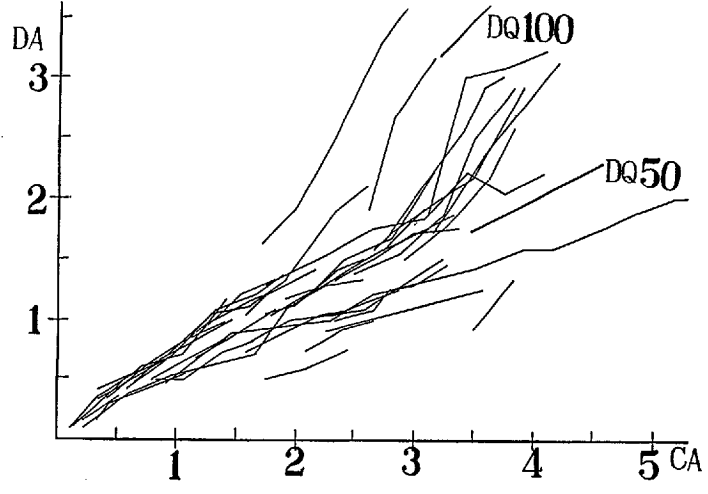


図2 加齢に伴うDQの変動(ダウン症)

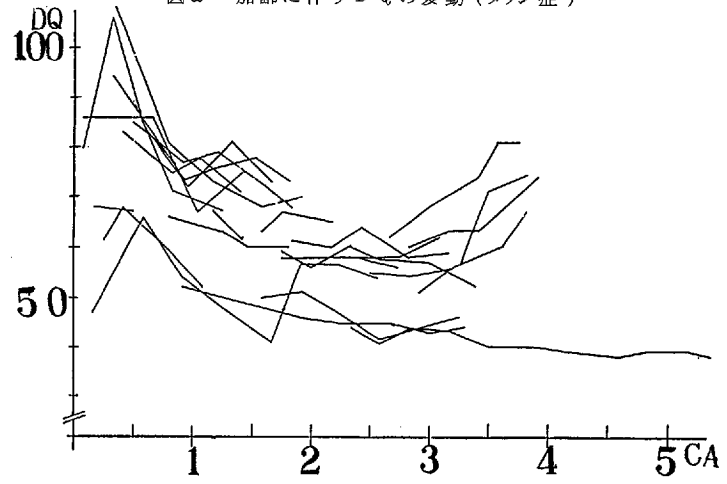
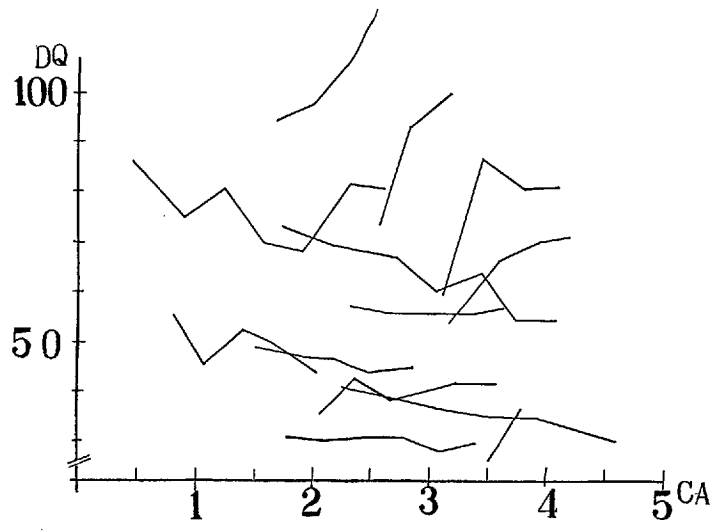
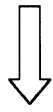
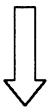


図3 加齢に伴うDQの変動(ダウン症以外)





**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

「ポーテージ早期教育ガイド」(アメリカ合衆国ウィスコンシン州ポーテージ:1976年改訂版)を、日本の文化・言語体系・生活習慣に合わせて翻案した「ポーテージ乳幼児教育プログラム」の臨床的妥当性を検討するとともに、早期対応の効果を評価する。